

平成 15 年度

卒業論文

イスタンブールの「カフェ」を考察する
ー作家サイト・ファーイクの視点からー

指導教官：林 佳世子

学籍番号：8599108

南・西アジア課程 トルコ語専攻

清水 章子

イスタンブールの「カフヴェ」を考察する

ー作家サイト・ファーイクの視点からー

<目次>

はじめに

第一章 作家サイト・ファーイクについて

- (1) 生涯
- (2) 作品の特色
- (3) サイト・ファーイクとカフヴェ

第二章 短編小説にみるカフヴェ

- (1) 裏町のカフヴェ Mahalle Kahvesi
- (2) 一群の男たち Bir Takım İnsanlar
- (3) 夜の仕事 Gece İşi
- (4) 無用の人 Lüzumsuz Adam
- (5) エフタリクスのカフヴェ Eftalikus'ın Kahvesi
- (6) 砂糖少なめ Az Şekerli
- (7) アルジェリア街区 Cezayir Mahallesi

第三章 カフヴェの分析

- (1) 作品中の役割
- (2) 情景
- (3) 社会的機能

おわりに

参考文献リスト

付録 作品翻訳

夜の仕事 Gece İşi

はじめに

現代トルコの街中を歩いてみると、タバコの煙に包まれたにぎやかな「カフヴェ(kahve)」(コーヒーハウス)を多く見かけることができる。現代のカフヴェは歴史的なそれとは異なり、チャイ、コーヒーをはじめ多くの飲み物を提供し、水タバコが吸われる場所となっている。また、バックギャモン、ビリヤード、カードゲームをして時間を過ごす人々も多く見受けられる¹。主な目的は、喫茶をするというよりは時間をつぶすことや人と会う事であり、エンターテインメントの分野で人々の生活に欠かせないスペースを提供している。多くのモスクの近くにはこのようなカフヴェが存在し、礼拝に訪れる人々の交流の場としても利用されている。

もともと歴史上のカフヴェの機能は現代のそれよりも、社会システムをうまく機能させるための施設として重要視されていた。トルコにおけるカフヴェは、「16世紀以降、イスタンブールにおける様々な社会的立場の人々にとっての①情報入手のための②余暇を有意義に過ごすための③楽しむための場所であり、さらに、非宗教的な社会の需要を満たす形で、それぞれが異なった文化・伝統を形成し普及していった商業目的の場所」²といった具合に一言では言い表せないほど多くの機能³を果たした場所であった。このような特徴は西欧のコーヒーハウスにもあてはまる⁴。

Turgut Kut はカフヴェが社会的にも政治的にも重要な施設であったことを強調している。そこは、真っ先に思い浮かぶ集会場であり、身の上相談、政治行政に関する議論が行われ、情報を共有するという目的もあったという。「カフヴェ政治(Kahvehane Politikası)」や「カフヴェ集会(Kahve Toplantısı)」⁵といった用語も生まれたほどである。⁶

¹ トルコ文化観光省 http://www.kultur.gov.tr/portal/default_tr.asp?belgeno=37119

² Işın, Ekrem. “Kahvehaneler”, *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, vol.4, İstanbul, 1994, p.386 (以下 Işın と略記)

³ 歴史的に見ると、その種類は様々で、人々の用途によって、通うカフヴェが異なっていたことがわかる。地区(Mahalle)を単位とするカフヴェ(Mahalle Kahvehaneleri)はモスクと関係が深く、祈りの時間を待たための集会所としての役割を果たした。エスナフ・カフヴェハーネ(Esnaf Kahvehaneleri)は、商業目的で用いられ、イスタンブールの貿易事務所の原形であったともいえる。イエニチェリ・カフヴェハーネ(Yeniçeri Kahvehaneleri)はイエニチェリが経営しているもので、政治、行政に関する議論が生まれた。アシュク・カフヴェハーネ(Aşık Kahvehaneleri)、もしくはセマーイ・カフヴェハーネ(Semai Kahvehaneleri)とよばれるものは、主に吟遊詩人が歌ったり伝統的音楽を奏でたりする場所で、文学も生まれたと言われている。(Işın pp.386-392)

⁴ 西欧の市民社会(英、仏)に根付いたコーヒーハウスについては、臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る』中公新書(中央公論社)、1992、pp57-142

⁵ トルコ語のカフヴェ(kahve)は喫茶室を表すと同時に、コーヒー自体をあらわす言葉でもある。ここでは、コーヒーの意。

⁶ Kut, Turgut. “Kahvehaneler”, *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*, vol.3,

カフヴェに類似する場所として、公衆浴場（ハمام）がある。男性の社交場としてカフヴェが上げられるならば、ハمامは女性も通うことができ家以外の場所で人々と交流できる場所であった。しかし、これらの本質的に異なる点は、ハمامでは娯楽と呼べるものが行えず、入るのにお金がかかるため裕福な人しか通えないといったマイナス面があった。そのためにカフヴェほど毎日の日課として庶民の間に浸透しなかったのである。⁷

チャイ（紅茶）の流入が始まった19世紀以降、イスタンブールの喫茶文化には大きな転機が訪れる。高級感漂う健全な雰囲気のカイハーネ（ティールーム）、チャイのデリバリーシステムを整えたカイオジャウ、公共的な場所で女性の喫茶行為を可能にしたカイバフチェシ（ティーガーデン）などが現れた。カフヴェの喫茶メニューにもチャイが加わることになり、その後コーヒーよりも圧倒的にチャイが飲まれるようになった。⁸

では最近のイスタンブールのカフヴェはどのような場所として人々に認識されているのだろうか。トルコ人の多くは彼らの持つカフヴェ文化を「トルコの恥ずべき部分」⁹と言うそうである。確かにそこは人々が怠けるためにあるような溜まり場と言っても過言ではない。だが、宍戸克実氏はトルコのカフヴェの存在価値は貴重で、トルコ社会から消滅する事はないと断言している。社会におけるカフヴェの役割はさらに多様化しておりカフヴェを中心とした社会組織の存在についても指摘している¹⁰。例を挙げれば、デルネッキ（様々な社会・文化的目的をもった組合や団体）は構成員のための集会所を設けており、見た目はカフヴェそのものである。会員制であるところが一般的なカフヴェとは異なる。また、トルコに伝統的に存在する小政党の各事務所や支部の形態もカフヴェであるという。政治的な会話の場としての存在価値があるため、ゲームなどは一切行われない。¹¹

ユニークな営業形態をとるカフヴェも注目を集めている。イスタンブールのカドゥキョイ(Kadıköy)にあるカフヴェ Reis Baba は、バザールが開かれる火曜日には男性の入店を禁止して、女性に店を提供している。これは店主のアイデアで、買い物をして疲れた女性がお茶を飲み、タバコを吸える場所の必要性を感じたことから始まったサービスだそうだ。店が込み合った際には、客である彼女達がお茶をわかして配るなど、女性客ならではの光景もみられるという。¹²

İletişim Yayınları, 1983. pp.859

⁷ ラルフ・S・ハトックス著、斎藤富美子・田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス—中世中東における社交飲料の起源』同文館出版、1993、pp.178-179

⁸ 宍戸克実「イスタンブールの喫茶文化」浅見泰司編『トルコ・イスラーム都市の空間文化』山川出版社、1993、p.26（以下、宍戸と略記）

⁹ 宍戸、p.25

¹⁰ 宍戸氏は前掲書で、イスタンブールの数地区を対象に行った喫茶施設の調査にもとづき、九つに分類されるカフヴェの特徴をそれぞれ呼称の由来、空間的特徴という点から列挙している。前述したチャイに関する施設も含まれる。

¹¹ 宍戸、pp.25-26

¹² ミリエット紙 <http://www.milliyet.com.tr/2002/03/21/pazar/paz02.html>

このような人々にとってかけがえのない場所カフヴェを文学の中でいきいきと描いた作家の一人にサイト・ファーイクがいる。その生活スタイル（第一章にて詳しく述べる事にする）からカフヴェを常に身近に感じていた彼は、物語の中にもしばしばカフヴェを登場させた。いくつかの彼の短編小説では、カフヴェにいる人々を中心的モチーフとして話を展開させている。

本論の目的は、サイト・ファーイクの目に映ったイスタンブールのカフヴェがどのような役割を果たしていたのか、彼が描いたカフヴェではどのような情景が広がっていたのだろうか、を明らかにするところにある。彼の作品の中にはルポルタージュも多く存在するが、本論では短編小説（フィクション）の中にみるカフヴェを分析するという手法を取るため、物語の中の役回りとしてのカフヴェ、を中心に分析してゆくこととなる。

フィクションである物語の中のカフヴェが分析対象となることから、当時実在したカフヴェの詳細を知ることは一見不可能かと思われる。しかし彼にとってカフヴェが生活の中で大きな位置を占め、多くの時間その情景を目にしていたことは事実である。よって、当時のカフヴェの情景や社会的機能という点からも考察することを試み、可能な限り明らかにしていきたい。

本論の構成は、まず第一章で作品を分析する上での正確さを高めることを目的に、サイト・ファーイクの生涯、作品にみられる特徴、生活スタイルとカフヴェの三点に言及し、彼とコーヒーハウスの関係がどのくらい深いものであったのかを明らかにしたい。続く第二章で作品の中にみるカフヴェを分析する。分析対象となる作品は7編で、1. 裏町のカフヴェ、2. 一群の男たち、3. 夜の仕事、4. 無用の人、5. エフタリクスのカフヴェ、6. 砂糖少なめ、7. アルジェリア街区、である。物語の中からコーヒーハウスの役割が描写されている箇所を引用し、そこから導き出されたものを分析結果として述べた後に、作品を紹介する意味で、「夜の仕事」の日本語訳を付することとする。

第一章：作家サイト・ファーイクについて

サイト・ファーイクは、Yurt Ansiklopedisi の「文学におけるイスタンブール」の項でとりあげられるほど、作品の中にイスタンブールの情景を描き出したことで著名な作家である。作家や小説家がイスタンブールを描き尽くしたと思われた時代に、他の誰も思いつく事ができなかった場所を調査した¹³、と紹介されている。「スナップショットのコレクション」¹⁴と評価されていることから、彼の作品から街の様子を思い描く事ができるだろう。

¹³ Yurt Ansiklopedisi, vol.6, İstanbul, 1982-1983. p.4218

¹⁴ Hickman, William. “Dream and Reality in Three Stories by Sait Faik” Halman, Talat

では、サイト・ファークはどんな人物だったのであろうか。生涯、作品の特色、カフヴェとの関わりの三点からみてゆこう。

(1) 生涯¹⁵

作家サイト・ファークは、1906 年、イスタンブールの東にあるアダパザル市で生まれた。父メフメット・ファークは裕福な材木商で市長もつとめた人物であった。幼少期をこの地方都市で過ごしたサイト・ファークは、1923 年、民族解放戦争終焉の年に両親とともにイスタンブールに移住し、イスタンブール男子高校(İstanbul Erkek Lisesi)に通う。しかし、友人と共に、アラビア語の先生の座布団に針を隠しておくという悪ふざけをした事がきっかけとなり退学し、1925 年、アジア側の古都ブルサの高等学校に寄宿寮生として転校した。

本格的に物語を書くことに興味を持ち始めたのはブルサでの学校生活の中であった。これを裏付ける次のようなエピソードも残されている。ある日、授業の一環として書いた物語「絹のハンカチ(İpekli Mendil)」が、教師によってクラス中に紹介され、さらに授業中全員でそれを読んだという。サイト・ファークは、初め、教師の行動の意図がわからなかったが、ある日その教師に呼ばれてこう言われた。「この調子で書き続けたら、さらに素晴らしい物語を書くことができるようになるだろう」¹⁶と。この言葉が書くことへの原動力となり、また彼の希望を後押しするものとなった。

1928 年、同高校を卒業するとともにイスタンブールへ戻り、イスタンブール大学の文学部に入学。翌年には最初の短編小説「風」をミリエツ紙(Milliyet)に発表した。だが、同学部では文学研究が主流であり、自由に執筆活動が行えない事がわかると退学を決意。父の意向により経済学を学ぶためにローザンヌへと旅立った。

だが、たった 15 日の滞在の後、フランスのグルノーブルに移りフランス語を学ぶ。一時帰国を経て今度はグルノーブル大学の研究生として滞在する。A. Miskioğlu はこの頃の彼の生活について次のように述べている。「グルノーブルでの生活は、サイト・ファークの人生の中でもっとも幸せな日々であった。マルセイユ、パリを初めフランスの地方都市を旅した。ぶらぶらと歩き回りその地域に入り込み、物書きになる。これこそがサイト・ファークの求めていたものであった。自由であり、独立して、圧迫から逃れて生きる。

Sait(ed.). *A Dot on the Map – Selected Stories and Poems by Sait Faik*, Indiana University Turkish Studies, 1983 (以下 Halman と略記) p.29

¹⁵ *Türk Edebiyatı Ansiklopedisi*, Cem Yayınevi, 1982, p.12、サイト・ファーク著、小山皓一郎編・訳 『イスタンブール短編集』 饗文社、1997 年、pp.303-305、Miskioğlu, Ahmet. *Sait Faik*, Altın Kitaplar Yayınevi, 1991(ikinci basım), pp.11-44 を参照し筆者がまとめたものである。

¹⁶ Miskioğlu, Ahmet. *Sait Faik*, Altın Kitaplar Yayınevi, İstanbul, 1991(ikinci basım), p.12 (以下 Miskioğlu と略記)

人を見て、知って、皆を愛す。サイト・ファーイクを喜ばせることばかりであった」¹⁷。

1934 年からは、トルコの有名な文芸誌ヴァルルク(Varlık)に、ヨーロッパを舞台とした作品を寄稿し始める。翌年にはイスタンブールに戻り様々な職を経験する。アルメニア人の孤児院でトルコ語を教えたり、穀物取引を行ったり、裁判傍聴記者を務めたりもした。仕事をする傍ら、1936 年には処女作となるサモワール(Semaver)を発表。1939 年に父親を失うと、母マクブレと暮らすための十分な遺産を相続した。母がそれを遣り繰りしてサイト・ファーイクに生活費を渡し、彼自身は作品の寄稿からわずかな著作権料を得て慎ましやかな生活を送った。

それから、夏はブルガズ島(Burgaz)で、冬はベイオールにある家で生活する。イスタンブールは彼の庭となり、友達も増えるとグルノーブルでの理想的な暮らしを再びイスタンブールで送ったのである。

1940 年から 1948 年までの間、新しい作品が出版される事はなかった。作品が裁判にかけられるなどの事件がきっかけとなっているほか、1944 年に患った肝硬変と向き合わなくてはならなかったことも事実である。以降、毎年作品を発表することとなるが、病が進行するにつれて精神的にも弱さが見えてくる。好かれる作家でありたいと願いながらも、自分は無用な人間なのではないかという問いが頭から離れず、孤独を感じ続けた。

晩年は、母と共にブルガズ島で暮らした。病は少しずつ進行し、1951 年には治療のためにパリを訪れるが、わずか 5 日の滞在の後に帰国している。1953 年にはついに国際的にも短編作家として高く評価される出来事があった。米国のマーク・トウェイン協会の名誉会員に選ばれたのである。だが、翌年の 1954 年には肝硬変のために亡くなった。

彼の死後、母の尽力により「サイト・ファーイク短編賞」が設立された。また、ブルガズ島の住まいは記念館として公開されている。

(2) 作品の特色

ここで、サイト・ファーイクの短編小説の作風について触れておきたい。今回本論で着目するコーヒーハウスを始め、イスタンブールの様々な場所、人、景色を描きだした作品にはどのような特徴があるのだろうか。

サイト・ファーイクの物語における第一の特徴は、サイト・ファーイクが物語の中で感情移入をしている点である。Talat Sait Halman は、感情移入が、語り手でもあり主人公としても作品に登場するサイト・ファーイクの、作品中の支配的な姿勢であることを指摘する。続けて次のように述べている。「彼が描く悲痛な場面は、時折彼自身の延長として描かれ、そこには彼の宿命のようなものさえ示唆されているようである。彼と同じように望み

¹⁷ Miskioğlu, p.20

を無くした百姓や、病弱な女性、見捨てられた子供、哀れな泥棒、売春婦、浮浪者などは、小さな幸せを得ながら生きているときもあるが、実際は悲劇を暗示するような毎日を繰り返している」¹⁸。自分が共感できる事を書く、ということも、一つの指針となっていたようである。作者であるサイト・ファーイクが物語の主人公になりすまし、その状況をナレーションのように説明しているかのような場面もある。街並みや、人々の様子、感情表現などもサイト・ファーイクが実際体験していることをそのまま描いたように感じられる。

第二の特徴は、使われている言葉が独特だということである。Yaşar Nabi Nayır は次のように述べている。「言葉の使い方、という点においてサイト・ファーイクはその土地独自の言葉を用いる傾向にあった。詩的な解釈を省くことなく他の言語に翻訳するのが非常に困難なのはそのためであろう」¹⁹。この特徴が、トルコ国内で作家としての高い地位を獲得したにも関わらず、外国ではあまり知られていない理由の一つだと指摘した。地元の人々が日常的に使っている言葉によって語られるストーリーは、読者に親近感を持たせ、多くの人に読まれ広まることとなった。

第三の特徴は、作品中に出てくる登場人物たちである。Talat Sait Halman の次の記述にその特徴が明らかにされている。「サイト・ファーイクの物語の登場人物は、いずれも個人的に面識のある人びとである。・・・彼らの生活をフィクションへと変えるとき、実際の個性をそのまま反映させ、彼らの特徴や、くせ、心理状態を生き生きと描き出した」²⁰。このことから、少なくとも人に関しては、実生活と物語上の違いはさほど大きくないという事が言えるだろう。

以上の三点から、作家自身と作品の相互関連性を見出す事ができる。主人公として作品の中に入り込む作者は、庶民が親しみやすい口語的な文章を綴り、交流のある友人を登場させ、自らの心理描写を行う。彼の書く物語はフィクションであるが、彼の生活は作品と切っても切り離せない関係にある。生活圏、交流のある人々、行動パターン、考え方など実生活が作品に及ぼす影響はかなり大きいと考えられる。

(3) サイト・ファーイクとカフヴェ

ここからは、サイト・ファーイクの実際の生活とカフヴェとの関わりを明らかにしてゆく。いったいどのくらい深い関係があったのだろうか。彼にとって、カフヴェはどのような場所だったのだろうか。

作家を生業とした後の彼は、物を書く以外の時間はフリーになったために、生活は自由な時間に満ちていた。彼が好んでしたことは、様々な地区を歩き回ることであった。脚本家であり、サイト・ファーイクの親しい友人であった Sabahattin Kurdet Aksal は次のように

¹⁸ Halman, p.7

¹⁹ Nayır, Yaşar Nabi. “Remembering Sait Faik” Halman(ed.) p.18 (以下 Nayır と略記)

²⁰ Halman, p.4

述べている。「サイト・ファーイクはとてもシンプルな生活を送っていた。通りを散歩したり、映画館の前のポスターを眺めたり、カフヴェに座って人々が行き交うのを観察していたのである」²¹。この発言から、カフヴェはもちろんのこと、サイト・ファーイクと様々な場所との関係が深いことがうかがえる。

カフヴェに座って行うことは、人々を観察することに留まらない。友人達に会い交流する場所でもあった。彼が交流していた人々は、社会的には弱者と位置付けられる人々が多い。漁師、くり焼きの少年、放浪者、靴磨き、そして彼らは皆、サイト・ファーイク行きつけのカフヴェの常連客で、多くの短編小説に登場する。サイト・ファーイクの交流は客のみに留まらない。カフヴェの店主やウェイターとも親しくしていた。そして、彼らと時間を過ごす事に喜びを感じていたという²²。

カフヴェはまた、彼の仕事場でもあるのだ。Talat Sait Halman によれば、彼は、フェリーボートに乗っている間やカフヴェで鉛筆を走らせ物語を書くことが多かったという²³。周囲の人の気配や物音を感じながらアイデアを考えていたのだ。むろん、それは彼が書こうとした物語の題材が人や音や景色だったからに他ならない。中でもコーヒーハウスは彼にとって客を観察するのに都合の良い場所だったという。また彼は、孤独を嫌った。常に誰かとの結びつきを欲していたのである。物を書くときでさえも。

コーヒーハウスに関して、サイト・ファーイク自身の次のような発言がある。「私の母は父が残してくれた家計を遣り繰りして食卓を食べ物で満たしてくれた。私自身は週に 5〜10 リラを稼ぎ、それでカフヴェに行くなどして満足した生活を送る事ができた」²⁴。サイト・ファーイクと母の暮らしはそれほど裕福なものであったとは言いがたい。父親が残してくれた遺産のおかげで、物書きとしての収入は少なくとも暮らしていくことができたのである。けれど、カフヴェに行かない生活はありえなかったのだ。それほど、彼にとって重要な場所であった事がわかる。

以上のことから、サイト・ファーイクの生活におけるカフヴェが、単に寄り道をする場所にすぎず、仕事や友人との交流の場としても用いられるなど、生活の大きな範囲を占めていたことは間違いない。切っても切れない場所なのだ。そんな作家が描くカフヴェが、作品の中でも重要な位置を占めていることは容易に想像できる。

サイト・ファーイクはそのようなカフヴェを作品の中でどのように描き出しているのだろうか。次の章では、物語の中でのカフヴェがどのような役回りを担っているのか、作品の内容に入り込んで見ていきたい。

²¹ Nayır, Halman(ed.) p.19

²² Nayır, Halman(ed.) p.17

²³ Halman, p.7

²⁴ Sait Faik. "In the Twentieth Years of Being a Writer" Halman(ed.) p.21

第二章：短編小説にみるカフヴェ

本章では、サイト・ファーイクの作品を抜粋し、その中でカフヴェがどのように描かれているのか、どのような役回りを果たしているのか、カフヴェが描かれている主要な作品の該当部分を引用しつつ、明らかにしてゆく。

サイト・ファーイクの短編小説は 171 編²⁵ありそれらを四つのテーマに大別することができる。一つ目は、幼少期の思い出とアダパザル及びブルサの記憶、二つ目はフランス時代、三つ目はイスタンブールの地区と貧しい人々、四つ目は島での生活と漁師達である²⁶。本論は、イスタンブールのカフヴェに注目していくため、上に挙げた中でも三つ目をテーマとした短編小説七編を筆者の視点で選び出して分析を進めてゆく。

作品を見ていく前に、このカフヴェに着目した先行研究を紹介しておきたい。アフメット・ミスキオール(Ahmet Miskioğlu)氏はサイト・ファーイクの人生、人間性、作品の評価などをまとめ一冊の本にし出版した。その中に数ページではあるが「サイト・ファーイクの作品における周辺環境」という項目を設け、作品上でその文脈に大きな影響を及ぼしている特定の場所や環境を取り上げ紹介している。

最初に取り上げているのが、居酒屋 (içki evleri)とカフヴェである。真っ先に取り上げていることから、上の二つの場所が作品において不可欠な場所であるというミスキオール氏の判断がわかる。居酒屋とカフヴェ以外にも、サイト・ファーイク自身や物語の主人公がよく訪れる場所として、公園、外国人地区、漁師の生活圏などにも着目している。

物語の中に登場するカフヴェには、失業者や浮浪者、苦悩を抱えた吟遊詩人、人情に飢えた教養ある人々がやってくる²⁷、いうなればそこは家柄や階層にかかわらずどのような人でも出入りのできる場所である。生活苦について語る者、絶望に打ちひしがれる者、とりとめのない会話をしている者、ゲームをしているものなど、サイト・ファーイクはカフヴェの情景を読者に想像させる。

また、ミスキオール氏は居酒屋とカフヴェの相互関連性を指摘する。作品における居酒屋の常連客は、同時にカフヴェの常連客でもある。例えば、あるならず者は、居酒屋でだいぶ酔っ払った後カフヴェを訪れる。また、ある者はカフヴェに座ってある程度時を過ごしてから、日々の苦悩を忘れるために、そして飲みなれた酒の味を求めて居酒屋へと向かうのだ。そこでは親友に出くわす確立も高い。²⁸このような登場人物の行動のパターンからも両者の結びつきを見て取る事ができる。

以下に用いる引用部分の日本語訳は、すべて本論の筆者の訳であるが、すでに日本語訳

²⁵ 作品数は *Türk Edebiyatı Ansiklopedisi*, Cem Yayınevi, İstanbul, 1982. p.12 による。

²⁶ *Türk Edebiyatı Ansiklopedisi*, Cem Yayınevi, İstanbul, 1982, p.12

²⁷ Miskioğlu, p.112

²⁸ Miskioğlu, p.112

が存在する 1. 裏町のカフヴェ、2. 一群の男たち、4. 無用の人、に関しては、小山皓一郎氏の訳も参考にした。

では早速、コーヒーハウスに関する作品を順にみていこう。

1. 裏町のカフヴェ Mahalle Kahvesi²⁹

この作品は、作品全体に渡りカフヴェを舞台として話が展開され、サイト・ファーイクの作品の中でもっとも良くその情景が描かれているといえるものである。その点から作品全体を引用したいところであるが、ここでは特に重要な場面のみを引用、紹介していく。

物語の主人公はある冬の日、夏の間に通っていたという裏町の庭付きカフヴェに入った。人目につかないこのカフヴェの庭は季節によって異なる情景を浮かび上がらせる。窓際に座ってしばらく物思いにふけると、カフヴェの灯りがまだともっていないことに気づく。

(以下引用)

細腰の美しいチャイ用のコップを私の前に置いていった店主は、

「冬の庭も悪くないでしょう？」

と言って庭にある青菊の上に積もった雪を指さした。

「年寄りたちに言われなければ、まだ灯りをつけないんですがね。すぐに文句を言い出すものだから」

カフヴェに灯りがつくと、庭の雪明りは霞んでしまった。

(引用ここまで)

カフヴェの常連客の中でも特に発言権を持っているのは老人達である。店内は常に彼らの望むような環境が保たれ、主人も意見に従う。彼らはカフヴェを公共の場にある第二の家のようにそこを訪れる。

主人公はカフヴェで新聞を読み始めたが、どうも集中できない。なぜなら他の客たちの話し声に聞き耳をたててしまっていたからだ。カフヴェには新しい客の出入りがあり、タヴラをプレイしている姿もみられる。

主人公の耳に入ってきたのは、カフヴェの客たちが生活の苦しさを語っている声である。また、カフヴェではタヴラを対戦している客が登場する場面が、この作品に限らず多くの作品にも見られる。そして、タヴラは対戦して楽しむのみではなく、観戦して楽しむ遊びであることもわかる。

物語は次のように続く。カフヴェに風変わりで暗い顔をした若者が一人入って来てスト

²⁹ 作品の引用部分は、Sait Faik, “Mahalle Kahvesi”, *Bütün Eserleri 4*, Bilgi Yayınevi, 1994, pp.9-14 より。

ーブの側に腰掛けると、大勢の客がいるにもかかわらず雰囲気は静まり返り、沈黙が続く。常連客たちは、あたかも感情を表に出すまいとするかのように無表情であった。するとそこに別の男が入ってくる。さてここからは、カフヴェの主人と常連客、どこことなくよそ者の客、主人公のやりとりをみてみよう。

(以下引用)

男が一人カフヴェに入ってきて老人達の方に歩み寄って言った。

「あなた方を呼んでいます。意識はありますが、たぶん朝までもたないでしょう。時々気が遠くなるんで……。アリ旦那、あなたに会いたがっていましたよ。マフムトさん、あなたにも。ハサン、よかったらあんたも来てくれ。彼はあんたのことが好きだったから」

三人が席を立った。ストーブのそばに座っている若者には目も向けなかったが、彼を鋭く見つめたような感じを残して、彼らは通り過ぎていった。まるで、故意に若者から目をそらせているようだった。

… (略) …

若者が言った。

「父さんじゃないか。父さんが死にそうなんじゃないか？」

店主は黙っていた。後ろめたい、不快な、重苦しい沈黙だった。そして、次の瞬間氷が溶けたようになった。しかし、店主の答えは私にとっては意外であり、若者にとっては残酷であった。

「いや、おまえの父さんじゃないよ」

… (略) …

ドアが開いた。老人とさっき呼びにきた男が入ってきた。ドアをくぐりながら、

「死んだよ、あいつは出て行ったのか？」と聞いた。

店主は両手を前掛けの後ろの結び目にかけて、凍りついたように立っていた。紐を解くかわりに結び直した。私のテーブルの方にやってきて、まるで私に説明しなければというように言った。

「車引きのチャーミルじいさんが死んだんです。さっきの奴は息子なもので。妹を悪い道に引き入れたから、父親は奴を勘当していたんだ……」

(引用ここまで)

主人公はその若者の妹がその後どうなったのか、無神経にもたずねてしまった。誰からも答えは帰ってこなかったので店を出たが、店主がその子を悪い道からすくったのだろう、と想像して物語は終わる。

知人が病に臥せっていて、今夜こそが峠だ、というような時、近所の親しい老人達はカフヴェに集まり、次の知らせを待っている。一人でじっとしているわけにも行かず、どこか集まれるところは、と考えたときに真っ先に思い出されるのがカフヴェであろう。ここ

から、街のカフヴェが地域に密着し、多目的集会所もしくは公民館のような役割をしている事が読み取れる。

カフヴェの主人は、単に客を知り尽くしているに留まらず、常連客や親しい人々の家庭の事情も把握しているほど地域のことに精通している。カフヴェの主人に聞けば、たいいていのことはわかるほどの情報の持ち主であるようだ。

2. 一群の男たち Birtakım İnsanlar

サイト・ファーイクは常に社会的弱者と一般的に呼ばれている人々と交流しながら生活をしていた。だから、作品に登場する人々がそのような人々であることは第一章でもすでに述べたとおりである。この作品には、無職で家を持たない人々が寝泊りするという「終夜カフヴェ(Sabahçı Kahvesi)」についての議論が書かれている。「Nothing happened.(結局何も起こらなかったではないか)」の作風で有名な³⁰サイト・ファーイクの作品にはめずらしく、社会問題ともいえる事象に言及している。その部分を紹介したい。

(以下引用)

「兄さん」と彼は言った。

「俺たちはトプハーネの終夜カフヴェに寝泊まりしています。みんな荷担ぎか下働きのような奴ばかりです。でも俺たちはまっとうに生きている。どうしたらいいっていうんですか。日々稼ぐのは五クルシか十クルシで、夜はカフェの親方に五クルシ払って店の隅っこに寝かしてもらおう。仕方ないんだ。下宿なんかに金が払えますか。安くても三十クルシだなんて、二日間は暮らせる金額ですよ。今夜は警官の手入れがあって、終夜カフェで寝るのは違反だって、俺たちをみんな追い出したんですよ。とうとう俺たちも一致団結したんです。市長に会いに行こうじゃないか、市長をたたき起こして俺たちの苦悩を訴えようというわけで、先発の連中があの坂道を上がって行って、別の一団があとに続いたんです。兄さんは俺たちの仲間を見なかったというんですね」

… (略) …

それはきっと 80 人近い群衆だった。その中には若い男達の姿もあった。大きな歩幅で歩き、その表情は真剣さに満ちていた。先頭を歩く者達にはさらに強い意志がうかがえた。真剣そのものだった。立ち止まって彼らを見ている若い傍観者もちらほらいた。しかし、当人達は誰にも気を取られることはなかった。ただ、一番先頭に行く者達は叫びながら何か話していた。市長とどう話し合うかの練習をしている様子だった。

身なりに視線を移した。そうだ。紫色の綿がはみ出した綿入りの上着を着て、リンネルのズボンを履いた男は正しかったのだ。彼のような一団の男達が歩いていった。私の耳には、

³⁰ Halman, p.29

ゾングルダク出身のあの男が「俺のような格好をした男達だよ」と言ったときの声が再び響いたようだった。

終夜カフェを禁止する前に、夜間宿泊所が緊急に必要だ。イスタンブールの冬が、あるときはとてつもなく長く、そして終わりのない災いになりうるのだ。知る人だけが知っている。³¹

(引用ここまで)

ホームレスや社会的弱者にとって警察は敵である。最近のイスタンブールでも、通りで者を売り歩く大人子供を多く見かけた。警察にとがめられはするが、その行為は彼らの生活を支えているのである。違法ではあるがそうせざるをえない境遇の人々が多い。

夜間宿泊所の機能を果たしていた終夜カフェで眠ることが違反だとしたら、家を持たないものは路頭に迷うしかないのである。夜間宿泊所の必要性を説いたのは筆者自身であるのか、それとも物語の主人公に言わせただけに過ぎないのかは定かでないが、社会問題に言及しているという点で他の作品とは異なる特徴を持っているといえるだろう。

3. 夜の仕事 Gece İşİ

「一群の男たち」に出てくる話題と同様に、この作品に出てくるカフェも終夜カフェである。家なき子(Sokak çocuğu)の安息の場所はどうのように描かれているのだろうか。

(以下引用)

長椅子の上で裸の小さな子供が二人うたた寝をしている。二人はこんなにも温かいカフェの中にいるにもかかわらず寒さに震えていた。オメルは、スイカの種ほどに小さい鼻をしているこの子供達に近づいた。

「この子供達は何だね、アリ？」

アリはオメルの側に来て、悲しく表情を曇らせた。

「家なき子は気の毒ですよ。中に入れてやらないわけにはいかないのです。どうしましょうね」

オメルはアリの方を向いて、何も言わずにじっと見つめた。そして、壁にかけてある絨毯をたくましい腕で抱え、取り外してこう言った。

「ただ哀れむだけでなく、このぼろきれでもかけてやっておくれ。見てくださいよ。これではどこにいたって凍りついてしまうよ」

肌が出ていた部分がなくなった二人の小さな子供は、上にかけられた絨毯で目覚める事

³¹ Sait Faik, “Birtakım İnsanlar”, *Bütün Eserleri 1*, Bilgi Yayınevi, 1993, p.77-80 より引用。

もなくそれに包まれた。互いに向かい合うように巻かれて子供達は深い眠りに落ちていった。³²

(引用ここまで)

この場面からも、終夜カフェが貧しいもの達の避難所となっている事がうかがえる。店主も凍える子供を中へ入れてやらないわけにもいかず困ってはいるが、結局は彼らを助けてやるのである。

4. 無用の人 Lüzumsuz Adam

ここに登場するカフェは、トルコ風ではなく西洋の、特にフランスにあるカフェのようである。それはなぜなら店主が外国人のマダムだからだ。主人公は、朝目覚めるやいなやそのカフェに走るほどのカフェ好きだ。

(以下引用)

私は目覚めるやいなやカフェに出かける。そこはとても清潔で、テーブルが七つか八つおいてある。物静かな客が多く訪れ、店の隅でベジークやピナクルのようなカードゲームや、チェスを楽しむ者もいる。店主はフランス人とユダヤ人の血を引く女性で、申し分のないマダムである。私はカフェに入るとすぐに挨拶する。

「ボンジュール、マダム」

「ボンジュール、ムッシュー、ご機嫌いかが？」

私はお定まりの返事をするが、彼女はそれでは満足しないようだ。フランス語で感じよくお喋りをする。私には半分くらいしか理解できない。ときどき適当に「ウイ」と答えたり、話をかみ合わせるために間をおいて二つほど「ノン」を挟んだりする。私たちはすっかりお互いを理解する。マダムはフランスの雑誌を私にすすめる。私は雑誌の中の絵や写真を眺め、知らない単語はどこかに書きとめておいて、帰宅してから辞書で確かめてやっと意味を知る。翌朝、カフェで雑誌を読み直した時に「ああ、そういうことだったのか」と納得する。

「カプチーノね？」とマダムが訊く。

「ええ」とまずはトルコ語で答えておいて、その次にフランス語で「そうです」と言いそえる。マダムはとても喜んで、今度はカプチーノの作り方をドイツ語で説明し始める。³³

(引用ここまで)

³² Sait Faik, “Gece İşi”, *Bütün Eserleri 1*, Bilgi Yayınevi, 1993, pp.164-165 より引用。

³³ Sait Faik, “Lüzumsuz Adam”, *Bütün Eserleri 2*, Bilgi Yayınevi, 1992, pp.113-114 より引用。

引用部分から、カフヴェではタヴラだけでなく様々なカードゲームやチェスを楽しむ者もいることがわかる。

このカフヴェのオーナーは、フランス語で話し、フランスの雑誌をすすめる。主人公も彼女に合わせてたどたどしいフランス語で答え、語学の勉強も怠らない。このカフヴェはサイト・ファーイクがフランスで、人生の中でも最高の生活を送っていた頃を思い描いた作品なのではないだろうか。主人公が飲みつけているのもカプッチーノであり、どことなく西洋への憧れが感じられる。

物語の後半部分には、主人公が衣食に事欠く身の上になったとしてもカフェのマダムは店の前で一杯のカプッチーノを恵んでくれるだろうと、彼女の慈悲を期待する記述がある。

5. エフタリクスのカフヴェ Eftalikus'un Kahvesi

この作品を読むと、物語の主人公が明らかにサイト・ファーイク自身であることがわかる。なぜなら主人公に近づいてきた若者は将来作家を目指しており、主人公から物語を書くためのコツなどを聞き出している。さらに決定的なことに、サイト・ファーイクが書いた物語にも言及しているのである。

ある若者が主人公に声をかけてきた。そして、主人公に会えてうれしいと言った。主人公はからかわれているのではないかと多少の不信感を抱きながらもこの若者と話を始める。では、話の展開をみていこう。

(以下引用)

「あなたも物語を書くのですか？」

と私が訪ねると、

「私の年齢では皆のように詩を書きます。1作、2作物語も書いてみましたが、なかなかうまく書けませんでした。それよりも、批評の方に力を入れています。出版されたトルコ語の物語の中で知らない物語はありません。けれど、あなたの…」

「道の向こう側の男を見てください。彼は生まれたときから盲目なのです。道の反対側に向かって『マフムトさん！』と叫んでいます。つまり、彼がタクシム映画館の前にて、向かい側のボレッキ屋にはマフムトという名前の人がいるということを知っているということです。私達にはきっと直感だろうと思われるけれど、実際それを知るのには何年もかかったはずなのです」

「ではあなたはこのような事からすぐに素晴らしい物語を…」

ありえなくはない。だが、わたしはこれを物語にすることはないだろう。ただ、考えているのだ。盲目の人は、周囲の空気や物音から自分がどこにいるのかがわかるのであろうか、でなければ歩数を数えているのか？

… (略) …

「どうやって物語を書くのですか？」と聞いてきた。

笑ってしまった。からかっているのだろうかと思って、彼の表情に目を向けた。いや、本当にからかっているのではない。なんていい若者なんだ。

「あなたの作品の中で、『無用の人』が一番好きです。次に『Baba oğul』と『数珠』という物語もありますね。それも気に入っています。『あずまやのある墓』も悪くないと思います」

… (略) …

「どうだろう、わからないな」と私はもう一度言った。

「だから、こうやって向こう見ずに。例えば、今だって物語を書いていますよ。タイトルもつけました」

「タイトルは何ですか？まずはタイトルをつけるんですね？」とは言わなかった。

「タイトルは何ですか？」とも聞かなかった。

「エフタリクスのカフヴェ。カフヴェという部分を抜いてエフタリクスだけでもいいかもしれない。それに物語との関連性はそれほど重要ではないな」

彼は、私が言わなかった部分も理解したようだった。

「つまり、このように物語を書くのですね？」と言った。

「どのように？」と今度は私が彼にたずねた。

「どう、って…まず始めにタイトルを考えて、次に一度話を作ります。そして二つを結びつけるように書く」

「いや、違いますよ。そうはしません。本当のところを知りたいですか？物語をどのように書くか、実のところ自分でもよくわからないんですよ」と言った。

コーヒーの代金を支払うために私達は席を立った。若者が、私に支払わせまいと親しみのこもったあせりをみせた。³⁴

(引用ここまで)

自分に興味を抱いているという若者と話をするためにカフヴェに向かった主人公に、あたかも作者であるサイト・ファーイクが自らの文学論ともいえる内容を述べさせているユニークな作品である。最初は自分の作品をからかいに来たのではないかと不信を抱いている主人公であるが、彼の熱心さから純粋に学びたいという意欲を察し、交流を深めていく。この作品の最後の場面では、タヴラをしている別な二人の客が、どちらが支払うかで口論となっている主人公と若者の姿をみて微笑んでいる光景が描かれている。ほのぼのとしたカフヴェの雰囲気を感じられる。

6. 砂糖少なめ Az Şekerli

³⁴ Sait Faik, “Eftalikus’n Kahvesi”, *Bütün Eserleri* 7, Bilgi Yayınevi, 2001, pp.66-71 より引用。

前に紹介した「無用の人」に続き、この作品でも客とのやりとりを通した店主の人柄というものが見えてくる。物語は、カフェに立ち寄った若者が砂糖少な目のコーヒーを注文するところから始まる。店主は「砂糖少な目のコーヒーを飲む若者なんて」と少しバカにしている様子である。

(以下引用)

店主はまるで嫌がらせかという程の量の砂糖入りコーヒーをこしらえた。一杯の水と一緒に若者のところに持ってきた。年老いた店主は、この地区にたまたま通りかかった青年に *takınılacak* 謙虚な顔で、「いらっしゃい」といった。

若者は、店主が側に来たのがわからないようであった。店主に気づくと、カフェに入ってきた時のような身振りにすぐになれなかった。決して見せかけではない笑みを浮かべ、「これはどうも。砂糖少なめにしてくれましたよね?」と言った。

「砂糖少なめなんて、老人の飲み方ですよ」と店主は言って、「あなたのような青年にはもう少し多めが合うと思ったので、そのようにしたんですよ」と続けた。

すると若者は「砂糖に適量があるというのなら、それに従いましょう」と言った。

… (略) …

店主がコーヒーとコップを下げにやってきた。

「私が作ったコーヒーをお気に召さなかったようすな」

「飲めないよ、こんな蜂蜜ほどに甘いコーヒー」

「今度は砂糖少なめにして作りましょう」

「すみませんね *zahmet olmasın*」

テーブルの大理石は氷のようだった。けれどコーヒーは熱かった。若者はオーバーを脱いだ。チケット売りの役人と労働者と白髪の3人がカードゲームをしていた。

… (略) …

「今度のは砂糖少なめです。これも気に入らなかったら私はへそを曲げてしまいますよ」と店主が言うと、ゲームをしていた一人が、

「ムルタザよ、おまえの入れたコーヒーが気に入らないやつもいるんだな」と言った。

若者は真っ赤になった。雷のようにすばやく声のする方に振り返った。さっきの男は、「気にしないでくださいよ。いやね、ムルタザは自分が入れたコーヒーが気に入られなかったかと思うとすぐにカーッとするたちでね。俺たちがそんなこと言ったら、頭の受けからカップの中身をかけられちまうよ。俺たちにだけで、よそ者にはそんなことしないけど」と説明した。

… (略) …

「そうなのかい、ムルタザさん。でも私に罪はないのだよ。いつも砂糖少なめで飲むか

ら仕方ないんだ。腹を立てることはないよ」³⁵
(引用ここまで)

カフェは基本的にその地域に密着しているから、常連客も近隣に住まいや職場がある者が多い。他の街のものがカフェのドアを入ると、異国人のように浮いた存在となり、カフェ全体の注目の的となる。この作品の店主は頑固な老人で、自分の作るコーヒーに自信があり、良かれと思って作った砂糖多めのコーヒーが気に入られなかった事がわかると、その若者が店を出たあとに常連客にやつあたりする³⁶。店主と常連客はカフェという屋根の下に住む家族のようであり、彼ら対よそ者である若者という構図が興味深い。

7. アルジェリア街区 Cezayir Mahallesi

物語は次のように始まる。午後の3時から4時の間、人々は映画館や学校やお役所へ行くためベイオールはこのカフェは閑散としている。主人公達が独占できる時間帯のカフェではどのような光景がみられるのか。

このカフェでの話題は二つ。病気についてと新聞の三面記事についてである。

ある男は、近くにいる別の男に医者を紹介すると言っている。肝臓をよく診てくれる医者らしいが、紹介されている男は実際肝臓ではなく、腎臓が悪かったのだ。

主人公の肝臓も悪かったためその薬の名前を聞こうとしていたが、どうやら聞きそびれてしまったらしい。次にもまたその名を言うだろうと期待して耳をそばだてる。

ここでもサイト・ファーイクは自分が冒されている肝硬変という病気を、肝臓病として登場させているようだ。客は皆この客に注意して耳を傾けていた。なぜなら、口伝えにはあるけれども医者に関する話題、しかも信頼できそうな話題をもっていたからだ。

ある者は新聞を読んでいた。そして小さな記事に目がとまると、隣のヒュセインという男にその内容を伝えた。それはアルジェリアに雪が降ったという内容だった。

(以下引用)

ヒュセインは当惑して「雪が降ったのか？」と聞くと、新聞の男は「そうみたいだ」と答えた。

彼らは黙ってしまった。私は退役をした老人の話を聞くために椅子をもう少し前の方へ引こうとしたところだった。新聞の男は「ありえるのか？」と言った。

もう一人の方は口をきつく結んだ。ありえるのか、と聞いていた。ありえないのか？私にはわからなかった。つまりアルジェリアに雪が降るのか否かという問題が。手前のこの

³⁵ Sait Faik, “Az Şekerli”, *Bütün Eserleri* 7, Bilgi Yayınevi, 2001, pp133-135 より引用。

³⁶ Sait Faik、前掲書、p.136-137

男が口を結んだ意図が明確になろうとしていた。

「ということは、ナツメヤシに害はないのか？」

もう一度口をきつく結んだ男をみて、さらに確信を得た。

「ナツメヤシは大丈夫なんだな？」

「心配することはない。ナツメヤシの実に雪は積もらないさ。すぐに落ちてなくなる」³⁷

(引用ここまで)

雪が降ったか降らないか。こんなことは彼らにとって何も影響を及ぼさないし、雪が降ったらナツメヤシの木がどうになってしまうのかなんて、実際どうでもよさそうなことである。だがそのことを真剣に聞いている男は主人公の興味をそそった。もう葉の話なんてどうでも良くなっていた。

物語の最後には、映画が終わった後みるみる客でいっぱいになってゆくカフェの様子を描かれている。主人公が気がついた時には、葉の話をしていた老人をはじめ多くの客がいなくなっていた。見知らぬ客に埋め尽くされたカフェはすでに「彼らのもの」ではなくなってしまうからだろう。

以上の七編の作品はどれもカフェの存在なしに話の展開がなされないであろう物語ばかりである。それぞれカフェの光景がもっともよく表されているだろう箇所を引用することによって、カフェの役割を分析するヒントとなるシーンを頭の中で思い描く事を試みた。次章ではそれらのシーンを振り返りつつ、その役割、情景、機能に焦点を当ててゆく。

第三章：カフェの分析

以上第二章では作品の中でもカフェが登場する代表的な物語をみてきた。作品に登場するカフェは、物語によってそれぞれ異なる趣をもっていた。本章では、そこから一貫性を見出して作品の中にみられるサイト・ファークのカフェ観や情景、機能をまとめていく。

(1) 作品中の役割

作品の中にカフェがなぜ頻繁に登場するのかという問いに対する答えは意外と容易に導き出せそうである。なぜなら、カフェという場所が作者の生活に不可欠なもので好ん

³⁷ “Cezayir Mahallesi”, *Bütün Eserleri 6*, Bilgi Yayınevi, 1993(onbirinci basım). p.106 より引用。

で通っていたのだから必然的にそこが舞台となる作品が生まれた、ことに違いないからだ。だが、作者の意図とはそれほどシンプルなものであったのだろうか。筆者はそうは思わない。サイト・ファーイクは物語を書く上でカフヴェを登場させる必要があったのだ。

カフヴェは誰のためにあるか。サイト・ファーイクに言わせればそれは庶民や社会的弱者のためにあるものだろう。彼らの生活は決して豊かなものではなく、その困難さを分かち合う人、場所が必要だった。彼らはカフヴェという社交場に来る事で、心の隙間を埋める事ができたのである。カフヴェは彼らを生き生きさせる場所だ。

カフヴェの主人の存在も忘れてはならない。「裏町のカフヴェ」の主人は、招かれざる客に主人公を介してしぶしぶチャイを出してやるが、心の中は怒りで荒れ狂い身震いをしていた。「夜の仕事」の店主アリは、家なき子をカフヴェに入れてやり、客にたのまれればシミット売りを探しにいくほどこき使われていた。「無用の人」の店主はフランス風のマダムで、フランス語を使ったりフランスの雑誌を置いたり、さらにはカプチーノをメニューに加えたりとユニークな雰囲気をかもし出していた。「砂糖少なめ」に登場する主人は自分の入れるコーヒーに誇りをもっており、よそ者と思われる客にも飲み方を指導してしまうほどコーヒー通であった。どの主人も地域の人々に慕われ、弱者を守る優しさを持ち、個性的である。物語の中での彼らの役割は大きい。それぞれの物語に独特な味が出るのは、彼らのキャラクターあってこそと言っても過言ではないだろう。

また、カフヴェでは人と人との物語が生まれる場所である。サイト・ファーイクが執筆を行っていた当時の若き作家 Oktay Akbal とサイト・ファーイクの面白いやりとりがある。ボスフォラス海峡沿いのカフヴェの側に座っていたときのことである。サイト・ファーイクが「カフヴェを説明しようとする。まず始めに目につくもの、説明する事は何か？」と問うと Akbal は「壁にかかっている絵、次に店内の様子を説明する」と答えた。これに怒ったサイト・ファーイクは「物語は壁についているのではない。そこに座っている老人にあるのだ！」と指し示した方向には二人の老人が座りチャイを飲んでいたという³⁸。このことからカフヴェは物語の宝庫だといえることができるだろう。カフヴェは、喫茶の目的に使われると言うよりは、人と人とが接触する目的で訪れる場所なのである。「エフタリクスのカフヴェ」でも、サイト・ファーイクと作家を目指す若者の新たな物語が生まれたといえる。

(2) 情景

作品から、カフヴェの店内の様子もうかがえた。まず、客が何をやっているかであるが、第二章で見てきた物語を見ると次の行為が挙げられる。生活苦について話す、新聞を読む、眠る、カードやタヴラなどのゲームをする、物思いにふける、など様々だ。特別な用事が

³⁸ Kudret, Cevdet. *Türk Edebiyatında Hikaye ve Roman*, Cilt.:3, İnkılap Kitabevi, 1990.

あってカフヴェに来ているのではない。「アルジェリア街区」では新聞の隅にある小さな記事について客が議論をするなど、あまりにも平和な情景が描かれていた。

また興味深い客の構図も浮かび上がってきた。カフヴェの客は地域に密着しているということは第二章の「砂糖少なめ」の箇所でも述べた。カフヴェの店主を含む常連客とふらりと立ち寄ったよそ者（外国人にかぎらずイスタンブールの違う地区の者も含まれる）の間には大きな壁があるようだ。サイト・ファーイクの作品には、異教徒を思わせるよそ者がカフヴェに入ったときの張り詰めた空気などが多く描写されている。現代のイスタンブールのカフヴェに関して、穴戸氏は来店のマナーを次のように説く。「初めて来店するならば、オジャック（チャイを沸かす場所）の近くに座る事を勧める。なぜなら異教徒であるならなんらかのコミュニケーションが求められ、チャイを飲む事以外の来店の目的を示す必要があるからだ」³⁹。人々には本来、家族のように毎日顔をあわせる客が集う場所という認識があるようだ。

（３）社会的機能

みてきた作品の中で最も顕著に表れていた機能は、終夜カフェの宿泊所としての機能であろう。「一群の男たち」では一種の社会問題として取り上げられ、カフヴェでの寝泊りが違法ならば新たに夜間宿泊所を作る必要がある、という主張がなされていたし、「夜の仕事」では家なき子の安息の場（いつも気を張っていなければならないという場面もあったが⁴⁰）としての機能を果たしていた。終夜カフェは弱者の「駆け込み寺」としても位置付ける事ができる。

「裏町のカフヴェ」の舞台となったカフヴェには、公民館としての役割も見出せた。カフヴェは地域住民の会合の場所でもあるようだ。この作品では、近所で親しまれた老人の病状が悪化して明日やも知れぬ状態だとわかると人々の足はカフヴェへと向かった。冠婚葬祭に関連する出来事の合間の待合所としての顔も持っていたとも考えられる。

最後に、カフヴェは情報の宝庫である、ということを挙げておこう。カフヴェの主人の役回りとしての重要性は本章（１）の部分ですでに述べたが、その他にも、筆者は彼らをもつ情報量に注目した。「裏町のカフヴェ」では、店主本人も問題に関わっている当事者ではあるが、地域の人の家庭問題を把握していることがわかる。それを抜きにしても、常連客たちの「公共の家」として存在するカフヴェの店主が、そこに通う人々の人間関係を把握していることはたやすく想像できる。「夜の仕事」の店主は、シミット売りが今頃どのあたりにいるのか見当をつけられるほどだ。あたりまえではあるが、カフヴェは常に同じ場所に存在する。そして常連客の出入りが頻繁である事を踏まえると、人間関係はもとより、その地域に関する情報の宝庫でもあるといえる。

³⁹ 穴戸、p.25

⁴⁰ 本論末の全体訳を参照のこと。

以上のように、サイト・ファーイクは作品の舞台としてカフヴェを積極的に登場させていたことがわかる。そしてその意図は物語を大きく展開させるとともに、より多くの人の愛を描くためであったと思われる。

おわりに

作家サイト・ファーイクは実生活の中にも、物語の中にもカフヴェの存在を必要とした。そして人間味あふれる登場人物をカフヴェへと導いた。そこまで重要視されるカフヴェの存在意義は何なのだろうか。

それは、変化の少ない日常の中に新しい何かを発見できる場所だからではないだろうか。カフヴェに行けば何か面白い事があるのではないかと題材探しに行った場所なのだ。カフヴェは物語の舞台とするには絶好な場所であったのだから。

けれどそれ以上に、カフヴェが人の温かみに接する事ができる場所だからではないかと筆者は考える。サイト・ファーイクは単独で行動する事が多かったようであるが、実はいつも誰かとつながれていたかのように思われる。人との結びつきを得る場所こそがカフヴェなのだ。

本論文では、サイト・ファーイクの短編小説の中からカフヴェが登場する代表的な七作品を選び出し、その文脈からカフヴェを分析することを試みたが、作品数が少なく細部まで研究できたとはいえない。実際カフヴェが登場する作品はまだ多く存在する。二、三行記述してあるのみの作品も含めれば、ほとんどの作品に登場するといっても過言ではない。また、物語中のカフヴェの社会的機能について言及をしたが、当時の実社会での社会的機能については情報を得ることができなかった。裏づけの意味も含め、そのような資料が得られなかった事は大きな過失であった。以上が反省すべき点である。

より正確なサイト・ファーイクのカフヴェ観を知るためには、彼のすべての作品からカフヴェのサンプルを抽出し、分析するという研究がなされることが望まれる。そうすることによって物語の役回りとしてのカフヴェの存在意義がより明らかになってくるであろう。

現代では、失業者の溜まり場などと、あまり良いイメージをもたれていないカフヴェではあるが、カフヴェの存在しないイスタンブールなど想像もつかない。これからもカフヴェは、サイト・ファーイクの物語のように人々の癒しの場所、様々なドラマが生まれる場所であり続けるだろう。

参考文献

○対象とした作品

- Sait Faik, “Mahalle Kahvesi”, *Bütün Eserleri 4*, Bilgi Yayınevi, 1994(onuncu basım). pp.9-14
- , “Birtakım İnsanlar”, *Bütün Eserleri 1*, Bilgi Yayınevi, 1993(onikinci basım). pp.77-80
- , “Gece İş”, *Bütün Eserleri 1*, Bilgi Yayınevi, 1993(onikinci basım). pp.160-165
- , “Lüzumsuz Adam”, *Bütün Eserleri 2*, Bilgi Yayınevi, 1992(dokuzuncu basım). pp.113-121
- , “Eftalikus’n Kahvesi”, *Bütün Eserleri 7*, Bilgi Yayınevi, 2001(onikinci basım). pp.66-71
- , “Az Şekerli”, *Bütün Eserleri 7*, Bilgi Yayınevi, 2001(onikinci basım). pp.133-138
- , “Cezayir Mahallesi”, *Bütün Eserleri 6*, Bilgi Yayınevi, 1993(onbirinci basım). pp.103-107

○外国語文献

- Halman, Talat Sait(ed.). *A Dot on the Map – Selected Stories and Poems by Sait Faik*, Indiana University Turkish Studies, 1983.
- Miskioğlu, Ahmet. *Sait Faik*, Altın Kitaplar Yayınevi, 1991(ikinci basım).
- Işın, Ekrem. “Kahvehaneler”, *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, vol.4, İstanbul, 1994. pp.386-392
- Türk Edebiyatı Ansiklopedisi*, Cem Yayınevi, 1982. pp.12-14
- Kut, Turgut. “Kahvehaneler”, *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*, vol.3, İletişim Yayınları, 1983. pp.858-859.
- Yurt Ansiklopedisi*, vol.6, İstanbul, 1982-1983. p.4218.
- Kudret, Cevdet. *Türk Edebiyatında Hikaye ve Roman*, vol.3, İnkılap Kitapevi, 1990. pp.89-100

○日本語文献

- 宍戸克実「イスタンブールの喫茶文化」浅見泰司編『トルコ・イスラーム都市の空間文化』山川出版社、1993、pp.22-37

サイト・ファーイク著、小山皓一郎編・訳『イスタンブール短編集』饗文社、1997
臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る』中公新書（中央公論社）、1992
ラルフ・S・ハトックス著、斎藤富美子・田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス—中世中
東における社交飲料の起源』同文館出版、1993

○インターネットサイト

トルコ文化観光省 http://www.kultur.gov.tr/portal/default_tr.asp?belgeno=37119

ミリエツ紙 <http://www.milliyet.com.tr/2002/03/21/pazar/paz02.html>

付録 作品翻訳

Gece İşİ 夜の仕事

オメルは、吹き荒れる北西風に飛ばされるかの勢いで女を罵倒した。これを見て、居酒屋にいた一番若い男は鳥肌が立つほど怖れおののいた。彼の隣にいた 45 歳ほどの男は、「若い、まあ座りなさいよ」と言った。

若い男は、彼の魂が自然と体から抜け出していきそうなのを悟ったであろうこの男の方をおそるおそる見た。

夕方、客はまだ辺りが暗くならないうちに飲み始めたようだった。路面電車の灯りはともっていたが、オメルはわざと居酒屋の灯りをともさせないでいた。この薄暗い店内のほうが、客の話は弾み、よく飲んでくれるのだ。

やがて店の灯りの一つ一つが、スイッチを入れてもいないのにまるで自然に生まれ出るかのようになんげともっていった。電球はそれぞれ 5 分から 10 分間隔で明るさを放ち、すべての電球に灯りがともるのは一時間ほどたったところで、自然とオメルの苛立ちがおさまった頃であった。

すべての灯りがともると、居酒屋はいつもの情景を映しだした。店の中はオメルがいるかないのかわからないほどにぎやかになった。口の動きを止めずに話し続けるならず者、労働者、漁師、どう生業を立てているのかわからないギリシャ系の人やアルメニア人は、様々な話題で持ちきりだった。この居酒屋では悪に手を染めた事のない者も、スリ事件の話などを泥棒に混じって嫌悪感を示さずに聞いていた。世間から逸脱した者が犯す事件や、傷跡、殺人者を思わせる彼らの目が店内の鏡に映っていた。

オメルが罵倒した女は、顔を赤らめ、頬をこすりながら言った。

「何だっていうの、オメルさん。私が言った事をちゃんとわかってないのね。悪いほうに解釈したのよ」

「ちゃんとわかったさ。全てはお見通しだよ」

そこにバイオリン弾きのカラベットが入ってきた。彼はここにいるならず者達の尊敬を一心に集める男だ。この世界では芸術家としての振る舞いをみせていた。若者から年寄りまでだいたい皆が尊敬していた。顔にも、心にも、装いにも刑務所の雰囲気に残り、奏でるバイオリンにもその雰囲気がにじみ出していた。

オメルは、

「あっちに行つてろよ、カラベット」と言った。

カラベットは、考えようによってはこの発言を自分への侮辱と解釈する事もできた。それに自分にならず者の血が流れていると認めていたら、オメルに殴りかかっていただろう。カラベットは一步退いたが、どんな時でも機会さえあれば、半月刀でオメルを切りつけら

れるように身構えていた。オメルは、歌い手の女の赤くなっていない左の頬を指しながら、「もう一度男の議論に口出ししたらただじゃおかないからな！」と叫んだ。

少し離れたところには陽気な目をした、虫歯の多そうな、髪は脱色されているがまだまだ猫ほどに社交的なギリシャ系の老女がいた。彼女の代わりに老女はこう答えた。

「案ずる事はないよ、オメルさん。痛そうに頬を押さえてはいるけれど、あんたが心配する事はない。ゼフラはもう二度と男の議論に口をはさまないだろうから」

老女がおもしろおかしくそう言ったものだから、いつもはあまり笑わないカラベツでさえ笑みをこぼしていた。ゼフラは椅子に座り込んで「クソッ」と吐き捨てるように言った。オメルも演奏者の舞台から降りながら笑みを浮かべていた。音のなくなった居酒屋は、笑いの合図を待っていたかのように、少し前の活気を取り戻した。何も起こらなかったかのように、あの苦いオリーブ油とアンスの香料がたちこめる空気に包まれた。客は皆、自分が主人公の冒険を、熱望した物語を再び話し始める準備は整っていた。ただ、隅のほうで窓の外を眺めている二人の見慣れない客はウェイターを呼んで、店で何が起こったのか、と聞いていた。

ウェイターは、何か秘密の話をするように一人の耳元で何かをささやいた。それを聞いた者も連れの友人にさっきの出来事を次のように耳打ちした。

「女が、オメルは人が変わってしまったみたい、って言ったんだとさ」

二人の客はおそるおそるオメルのテーブルに目を向けた。オメルはぼんやりとして前菜をいじっていた。隣にいる厳しい顔つきの 45 歳ほどの男が、彼を慰めながら気を静めるように身振り手振りで何か説明していた。この 45 歳ほどの男の隣には 20 代の若者がいた。顔はピンク色で、頬はふっくらとして白く透き通っていた。笑うと醜くなり、一本の金歯が時折口の奥の方でピカピカと光っていた。目は暗い感じで光は見えなかった。髪はやわらかそうだった。肩幅は狭く、ならず者であるのにどことなく男らしさを欠いていた。

オメルが居酒屋から出たときにはだいぶ時間が経っていた。11 月の夜、湿っていて酒臭い小道を、他の誰も気にすることなく歩き回っていた。オメルが隣にいる 45 歳の男に、

「そいつを追いやってくれ。怖がりだからついてこさせないほうがいい」と言ったので、45 歳の男は、後をついてくる少年に向かって、

「子供は早く帰って寝なよ」と言った。

その少年は何も言い返すことなく風の中へと去っていった。黙って歩いていくうちに海岸に出た。夜の闇の中でお客を待っているのかどうかもわからない船頭達は二人を見ても「乗りますか？」とさえ聞かなかった。二人は二、三艘の船を飛び越えて船べりにたどり着いた。船の床にあるドアを開けてのぞいてみると中から熱い空気が流れ出た。下の恐ろしく暗い中からいびきが聞こえてきた。タバコの火のおかげで顔がいくつか見えた。その中の一つに気づくと驚いてすぐにかがんだ。死体が伸びきったように長い人間だった。顔は白く、ガラスの破片の標識みたいに、タバコの火に照らされて明るくなったり暗くなったりしていた。

「イドリス、おいイドリス」

横になっていた男は寝ぼけまなこで辺りを見回した。ちっとも驚いていないようだった。

「どなたですか、何か用ですか？」

「イドリス、起きろよ。俺だよ、オメルだよ」

「隣にいるのは誰だ？」

「誰だ、ってマヴロだよ」

「マヴロだって？何だっていうんだよ」

「何、ってやる事があるんだよ」

「どんなこと？」

「夜の仕事に決まってるだろ」

背の高い男は靴を探した。真っ暗で湿気に満ちた穴から這い出すように外へ出た。また船から船へと飛び越えて、ぬかるんだ歩道に着地した。そこでオメルは何時か聞いた。

「11 時半だ」と一人が答えた。三人は歩いた。どこも閉まっていて、見回りの笛の音や夜独特のガサガサとした音、誰も見えないのに聞こえてくる足音がどこからともなく聞こえてきた。

彼らは一軒の終夜カフェを見つけた。外から見ると、灯油のランプが灯っているようであったが、実際店内には 25 本のろうそくを使ったアンプルが一つあり、カフェの客達はお互いが見えていないだろうと思われた。中へ入ってみると、貧しい人とそこに漂う空気が、そしてそれらをすべて十分に照らし出す明るさがあった。

「やあ、アリ！」とオメルが声をかけると、イラン訛りで、

「やあ、オメルさん。いらっしゃい」

「新しいのがあれば、チャイを三つ。シミット売りはいないのかい？」

「そのうちに来ますよ。お茶は今沸かしたばかりです」

長椅子の上で裸の小さな子供が二人うたた寝をしている。二人はこんなにも温かいカフェの中にいるにもかかわらず寒さに震えていた。オメルは、スイカの種ほどに小さい鼻をしているこの子供達に近づいた。

「この子供達は何だね、アリ？」

アリはオメルの側に来て、悲しく表情を曇らせた。

「家なき子は気の毒ですよ。中に入れてやらないわけにはいかないのです。どうしましょうね」

オメルはアリの方を向いて、何も言わずにじっと見つめた。そして、壁にかけてある絨毯をたくましい腕で抱え、取り外してこう言った。

「ただ哀れむだけでなく、このぼろきれでもかけてやっておくれ。見てくださいよ。これではどこにいたって凍りついてしまうよ」

肌が出ていた部分がなくなった二人の小さな子供は、上かけられた絨毯で目覚める事もなくそれに包まれた。互いに向かい合うように巻かれて子供達は深い眠りに落ちていっ

た。

ストーブのすぐ近くには橋のたもとで漁師をしている麻薬中毒者が座っていた。物静かに音も立てずに考え事をしていた。魚達、大きな魚達、一匹一匹大男のような魚達、おとりの餌が海の中を真緑に光り輝かせる釣具や船べりや、エビ、人魚、大ぶりの巻貝でいっぱい船…。

少し先では黒い目をしてかなり肌が黒く、髪の毛のクリクリした 14, 5 歳の子供がいた。眠っておらず、タバコを見つめて物思いにふけていた。オメルはその子供の側へ行って腰をおろした。他の客はすこし遠ざかって椅子にもたれかかり眠り始めた。

少し経つとカフヴェの静けさを全くこわさない、麻薬中毒者を催眠から覚めさせないほどのささいな事件が起こった。オメルは、他の者から奪ったナイフを持って立ち上がった。その声は物静かで幸せに満ちていた。

「冗談だよ、冗談」

向かい側の小さな子供は海のように深く息を吸い込んでから、嵐のように喋った。

「僕にそんな冗談通じないよ、オメル兄貴。そういう冗談のために、ナイフで七回も切りつけたんだ。七回刺されたこともあるんだ」

その黒い子は、オメルの行動は品が悪く、低俗で卑劣だと、変わった黒海方言で主張した。オメルは驚きながらも微笑を浮かべながら話を聞いていた。

「本当に冗談でやったんだよ。君が何を考えているのか知らないとも思うのかい？」

そしてアリに向かって叫んだ。

「アリ！あと四つチャイをいれてくれないか？それから外でシミット売りを見つけてきてくれよ」

その子供はオメルとの間に起きた出来事が冗談であったということに、すぐには納得がいかない様子だった。しかし、今は四人が向かい合わせに座っている。四人は他の客に聞こえないような小声で話していた。ただ一人マヴロだけは、他のものにも聞こえるような声の調子で隣の客にこう言った。

「やっと見つけた。私達が探していたのはこういう男の子だ。俺たちと同類だ。仕事も呼び笛吹きだ」

その後も四人だけで内輪の話を続けた。シミット売りを探しに行ったアリが帰ってくると、四人が立ち上がっている姿を見つけた。四人はシミットにかぶりつきながら外へ出て行き、夜の闇の中へと消えていった。